

河南町文化財調査報告書 第9集

群田遺跡 II

平成10年3月

宮城県 河南町教育委員会

頁	行	箇 所	誤	正
3	11	16字目～	10世紀前半	9世紀後半
3	16	40字目～	土 師 器 鏊	土師器多口瓶

群田遺跡 II

発刊の辞

土を掘って埋もれていた昔のものを掘り出して、これは貴重だ、これは凄いものだとあらためて認識する埋蔵文化財の発掘調査がさかんです。

わが河南町でもここ数年、2人の専門職員の手によって、随分と多くの埋蔵文化財の発掘が行なわれてきました。

河南東中学校の建設（約5ha）、工業団地（約19ha）、住宅団地（約36ha）、広域水道企業団（約2.5ha）、広域行政事務組合（1.5ha）等々、それ以外でも企業、会社からの依頼による発掘調査が続けられてきました。

群田遺跡もその一つです。旭山丘陵には縄文時代からの多くの遺跡があります。山はいたる處に遺跡が存在しています。嘗て縄文時代から人間の住んできた処であります。遺跡は遺跡として存在していればよいというものではありませんで、発掘してみてようやくその性質、年代が判明します。その意味で、今回は株式会社高梨組の依頼によって発掘をいたしました。その概要がこの調査報告書です。心ある人・関心の深い人にいくばくかの参考となり、文化財の保護と活用に資することになれば幸甚であります。

平成10年3月

河南町教育委員会 教育長 浅野 鐵雄

例　　言

- 本書は、株式会社高梨組による群田土砂採取工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、実施された調査の報告書である。
- 発掘調査は、次の要項で実施した。
 - 〔遺跡名〕 群田遺跡(遺跡番号: 69049)
 - 〔所在地〕 宮城県桃生郡河南町北村字群田53番地
 - 〔調査面積〕 7,760.75m²(調査面積: 約4,100m²)
 - 〔調査期間〕 平成8年10月17日～平成8年11月8日(確認調査)
平成9年9月29日～平成9年11月5日(確認調査並びに事前調査)
 - 〔調査主体〕 河南町教育委員会
 - 〔調査員〕 河南町教育委員会社会教育課 主査兼社会教育主事 中野裕平
- 調査指導: 宮城県教育庁文化財保護課
- 発掘調査にあたり、次の方々から指導・協力をいただいた(敬称略)。
 - 〔発掘調査〕 宮城県教育庁文化財保護課: 真山悟、佐藤則之、後藤秀一
- 調査・整理参加者: 石川利江、伊藤とも子、及川元子、勝又くに子、加藤清子、高橋正、高橋義美、丹野幸子、中塙栄子、中塙喜重、米谷京子、三浦富子、渡部一男
- 土層の色調表記については、「新版標準土色帖」7版(小山・竹原: 1987.1, 日本色研事業株式会社)に準拠し、土性区分は国際土壤学会法の基準を参考にした。
- 本書の執筆・編集は、河南町教育委員会社会教育課 主査兼社会教育主事 中野裕平が担当した。

目　　次

発刊の辞

例　　言

目　　次

I. 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	1
II. 調査経過	7
1. 調査に至る経過	7
2. 調査の方法と経過	7
III. 基本層序	8
IV. 検出された遺構	8
1. 土　　壌	11
2. 焼土遺構	11
V. ま　　と　め	12
引用・参考文献	13
写真図版	14

I. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

群田遺跡は、宮城県桃生郡河南町北村字群田地内に所在し、JR石巻線前谷地駅の南方約6kmにある。遺跡の所在する河南町は面積69.33ha²、人口約18,271人(平成9年12月31日現在)の町で、宮城県の東部に位置し、石巻市の北西、矢本町の北方に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川に合流し、町の北部及び東部を区画しながら石巻湾に注いでいる。

東に標高60~90mの通称須江丘陵、西に寛岳丘陵からつづく標高70~170mの通称旭山丘陵、北に最高所173.9mの和測山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央部には低坦地があり、江戸時代には用水確保のため広瀬沼が造られたが、大正10年から昭和3年にかけて干拓された水田地帯となっている。

旭山丘陵は、旭山擁曲と大塩背斜からなり、標高173.8mの旭山を最高所とする。丘陵の西側半分を構成する大塩背斜の一角に、本遺跡は位置する。現況の大部分は杉や雜木の山林で、外に僅かの畠地や水田がある。

本遺跡は、細粒砂岩・中~粗粒砂岩・礫岩からなる中新統:三ツ谷層下部層が基盤をなし、その上に砂岩・シルト岩・礫岩からなる鮮新統:亀岡層、シルト岩・砂質シルト岩からなる同:竜ノ口層、さらに最上部には砂岩・シルト岩・礫岩・凝灰岩からなる同:表沢層の堆積がみられる(石井・柳沢ほか:1982)。

2. 遺跡の歴史的環境

町内には、群田遺跡の所在する旭山丘陵や須江丘陵などの丘陵部を中心に、多数の遺跡が分布している。これらの遺跡について、時代別にふれてみたい。

旧石器時代の遺跡は1箇所確認されている。それは関ノ入遺跡で、年代幅は4~9万年前と広いものの、同一層理面上の近接した位置からスクリイバー、剝片、二次加工のある剝片が各1点ずつ発見されている。「斜軸」と呼ばれる中期旧石器時代の特徴をもつものがあることから、確実にこの年代幅の中に収まっているものと推定される。

縄文時代の遺跡は24箇所確認されている。この中で、型式名のわかる土器を出土しているのは12遺跡である。時期の古い遺跡から追っていくと、以下のようになる。

桑柄貝塚は、カキを主体とした咸水産貝塚であり、前期(上川名II式、大木1式)の遺物を包含する。

関ノ入遺跡では、前期(大木2式)、中期(大木7a~8b式)、後期の遺物が出土している(中野:1988.3、中野・佐藤:1990.3、佐藤1993.3)。

朝日貝塚は、ヤマトシジミを主体とした汽水産貝塚であり、中期(大木7b、8a、8b式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか:1989.3)。

小崎遺跡からは、中期(大木8、9式)、後期、晚期の遺物が採集されている。

須江糠塚遺跡からは、中期(大木9式)の遺物が出土している(高橋・阿部:1987.3)。

宝ヶ峯遺跡は、縄文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学史的に有名である(伊東信雄: 1957.3, 松本彦七郎: 1919.5, 1919.9, 志間・桑月1991.11)。ここでは中期、後期(南境式, 宝ヶ峯式, 金剛寺式), 晩期(大洞B, BC, C1式)の遺物が出土している。外に土偶、スタンプ状土製品、石器、石製品、骨角器など多数の遺物が出土している。また、遺跡の一部には、オオタニシなどからなる淡水産の貝塚がある。

前山D遺跡からは、中期(大木8式), 後期(南境式, 宝ヶ峯式, 金剛寺式), 晩期(大洞C1式)の遺物が出土している。外に土偶、土製品、石器、石製品が出土している。特に、使用痕跡のない石器、石器製作時に派生するチップの出土が顕著である。トゥールが少ない点も特徴である。また、多数のたたき石、未製品の石錐などもある。宝ヶ峯遺跡の南東約250mに位置し、年代的にも重複することから、同遺跡との関連が考えられる遺跡である。

代官山遺跡からは、後期(南境式)の遺物が出土している(佐藤: 1993.3)。俵庭遺跡、大沢A遺跡からも後期(南境式)の遺物が採集されている。

前山C遺跡からは、後期(南境式)、晩期の遺物が出土している。ここも宝ヶ峯遺跡に近接しており、その関連が考えられる遺跡である。

太田沢遺跡からは、後期、晩期(大洞BC式)の遺物が出土している。沢合の緩斜面をたどって頂部へ達すると宝ヶ峯遺跡に至るため、ここも同遺跡との関連が考えられる遺跡である。

外に前山A遺跡・B遺跡、箱清水寺脇遺跡等があり、その多くは、旭山丘陵の麓部で平坦地に接する縁辺や沢をやや入ったところに広がる平坦部や緩斜面に立地する。また、宝ヶ峯遺跡を囲むように、放射状に位置している。しかし、その性格は、貝塚や発掘調査の実施された少數の遺跡を除いては不明である。

弥生時代の遺跡は2箇所確認されている。本鹿又遺跡では、旧北上川の河床から中期(大泉式)の遺物が採集されている。俵庭遺跡からは、土器は採集されていないが、アメリカ式石錐が採集されている。

古墳時代の遺跡は8箇所確認されている。須江糠塚遺跡では、前期(埴釜式期第II B段階)の堅穴住居跡が7軒検出されている。いずれも方形を基調としたもので、丘陵尾根上の平坦面に立地している(高橋・阿部: 前掲)。

関ノ入遺跡からも、前期(埴釜式期第II B～第III段階)の堅穴住居跡が2軒検出されている。いずれも一辺が約3m前後の方形を基調とした小型住居で、丘陵尾根上の平坦面に立地している(佐藤: 前掲, ほか)。

前山A遺跡からも、前期(埴釜式期第II B～第III段階)の堅穴住居跡が1軒検出されている。一辺が約6.5m前後の方形を基調とした大型住居で、丘陵尾根上の平坦面に立地している。

新田A遺跡でも前期(埴釜式第II B段階)の土器が採集されている。鶩の巣遺跡からは、前期(埴釜式終末段階)から中期(南小泉式)にかけての土器が採集されている。後期の遺跡としては、代官山横穴古墳群がある。外に、時期は不明であるが、高森山遺跡、群田遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡は28箇所確認されている。その大部分は丘陵上に展開されている。群田遺跡では、8世紀末から9世紀前半にかけての堅穴住居跡1軒とそれに後続する9世紀代の堅穴住居跡2軒、堅穴構7基、骨片の入った須恵器壺を立位に埋設した土壙1基などが検出されている(中野: 1993.3)。

須江丘陵では、丘陵の北から南まで窯跡が分布している。昭和61年度に調査された須江糠塚遺跡では、

奈良時代後半から平安時代初期にかけての住居跡9軒、9世紀後半から10世紀前半にかけての窯跡6基が検出されている。

昭和62年度から平成6年度にかけて継続的に発掘調査が行われた関ノ入遺跡では、奈良時代と平安時代前半の竪穴住居跡49軒(国分寺下層式期17軒、表杉ノ入式期23軒、不明9軒)、9世紀初頭から10世紀前半にかけての窯跡23基、9世紀代を主体とする粘土採掘坑跡48基、水簾坑と推定される土壌8基、10世紀半ば以降と推定される製鉄遺構3基などが検出されている(中野・佐藤:前掲、佐藤:前掲)。

須江瓦山窯跡には、奈良・平安時代の瓦や須恵器を生産した窯跡群がある。瓦の一部は、牡鹿郡衙あるいは牡鹿櫛跡と推定される矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木:1987.3)。平成3年度の発掘調査では土壌29基、焼土遺構1基が検出されている。土壌の中には、粘土採掘坑跡と推定されるもの11基、須恵器甕を横位に埋設したもの1基があった。

代官山遺跡では、8世紀後半と10世紀前半の窯跡が各1基ずつと、8世紀末から9世紀初頭にかけての竪穴住居跡1軒が検出されている(佐藤:前掲)。

長者館跡(長者平遺跡)では、一辺約60m前後の方形区画を土壌状の遺構と溝状の遺構がめぐらしている。溝状遺構は逆台形の断面形を呈し、上端幅約4m前後、下端幅約1m前後、最大深約2.5mの大規模な区画溝で、堆積土からは10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰が検出されている。近接した代官山遺跡より「佛」とヘラ書きされた土師器坏、関ノ入遺跡から仏具を模倣したと考えられる土師器甕・須恵器鉢が出土していることから、古代寺院と何らかの関係がある遺構の存在が想定される(佐藤:前掲)。

細田遺跡からは、9世紀代の須恵器、土師器(表杉ノ入式)、窯体の一部が採集されている。また、別地点で道路法面に窯跡が確認されている。

旭山丘陵側では、太田沢遺跡、前山C遺跡、前山D遺跡から表杉ノ入式の土師器が出土している。太田沢遺跡からは9世紀前半ころの竪穴住居跡1軒が検出されている。外に小崎遺跡、大沢C遺跡、俵庭遺跡などがある。

中世以降になると、旭山や須江の丘陵上など14箇所に城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は、金壳吉次の仮屋敷跡(藩政期には小島嘉右エ門の除屋敷跡とも言われる)の言い伝えがある。糠塚城跡(須江糠塚遺跡)は、古代の「中山櫛跡」に擬定されたこともあり(清水東四郎:1924.12、鈴木省三:1924.12)、「仙台領内古城書上」によれば、東西20間、南北16間の規模で、館主は須藤勘解由左衛門であるとされている(仙台叢書:1971)。小規模な平山城の形態を呈している。塩野田城跡は東西21間、南北27間の規模で、城主は須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝えられている(「安永風土記」)。小規模な平山城の形態を呈している。夷田館跡は、葛西氏家臣夷田氏の居館と伝えられている(「風土記御用書上」)。多くの城館跡は、年代、館主とともに不明である。

また、鹿又地区、須江地区を中心として、町内には、現在105基(鹿又55基、須江38基、北村8基、和測3基、広瀬1基)の板碑が確認されている。紀年銘の判読できるものの中で最古は弘安元年(1278)、最新は文明10年(1478)のものである(佐藤雄一:1986.11)。残念ながら、多くの板碑は原位置を保っていない。これらの中には、特徴的な板碑もある。関ノ入遺跡出土の板碑は、木炭窯の焚口等を強化するために、板碑を折って側壁などに貼り付けたような状況で出土した(中野:1994.6)。また、北村地区にある高福寺から

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	須江難塚遺跡 (櫛塚館跡)	集落跡 墓葬, 墓配	縄文(中), 古墳(前), 奈良, 平安, 中世	26	黑沢 A 遺跡	包含地	縄文, 古代
2	須江瓦山窑跡	窯跡	奈良, 平安	27	黒沢 B 遺跡	包含地	縄文, 古代
3	池袋田遺跡	包含地	古代	28	箱清水 A 遺跡	包含地	縄文(後), 古代
4	広瀬沼遺跡	包含地		29	箱清水 B 遺跡	包含地	縄文, 古代
5	宝ヶ峯遺跡	貝塚	縄文(中~晩), 奈良, 平安	30	箱清水寺脇遺跡	包含地	縄文
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	31	小友遺跡	包含地	古代
7	本鹿又遺跡	包含地	弥生	32	高森山遺跡	包含地	古墳, 古代
8	桑柄貝塚	貝塚	縄文(前)	33	大沢 A 遺跡	包含地	縄文(後), 古代
9	塙野田城跡 (塙煮田館跡)	城館	中世	34	大沢 B 遺跡	包含地	縄文
10	宿屋敷跡	城館	中世	35	大沢 C 遺跡	包含地	縄文, 古代
11	要害館跡 (鹿山館跡)	城館	中世	36	夷田館跡	城館	近世
12	武田館跡 (武田屋敷跡)	城館	中世, 近世	37	代官山遺跡	集落跡 窯跡	縄文(後), 奈良, 平安
13	柏木館跡	城館		38	桑柄遺跡	包含地	古代
14	小崎館跡	城館	近世	39	新田 A 遺跡	包含地	古墳(前), 古代
15	草田館跡 (草田遺跡)	城館 包含地	縄文, 中世	40	新田 B 遺跡	包含地	古代
16	喜多村館跡 (高地谷館跡)	城館	中世	41	代官山横穴 古墳群	横穴古墳	古墳, 古代
17	青木館跡 (林光館跡)	城館	中世	42	群田遺跡	集落跡	縄文, 古墳, 奈良, 平安, 江戸
18	新城館跡 (駒立館跡)	城館	中世	43	奈良山遺跡	窯跡	古代, 江戸
19	駒場館跡	城館	中世	44	御塩蔵場跡	蔵跡	近世
20	俵庭遺跡	包含地	縄文(中・後), 弥生, 古代	45	細田遺跡	窯跡 包含地	縄文, 奈良, 平安
21	長者館跡 (長者平遺跡)	城館 包含地	縄文, 古代, 中世	46	鷺の巣遺跡	包含地	古墳
22	関ノ入遺跡	集落跡 窯跡	旧石器, 縄文(前~後), 古墳(前), 奈良, 平安, 中世	47	前山 B 遺跡	包含地	縄文, 古代
23	小崎遺跡	包含地	縄文(中~晩), 奈良, 平安	48	前山 C 遺跡	集落跡	縄文(後・晩), 奈良, 平安
24	太田沢遺跡	集落跡	縄文(晩), 古代	49	前山 D 遺跡	集落跡	縄文(中~晩), 奈良, 平安
25	前山 A 遺跡	集落跡	縄文, 古墳(前), 奈良, 平安				

第1表 遺跡地名表



第1図 河南町の遺跡

この地図は、昭和省営土地整理部の水堅を基て、河野義行の1/25,000
地図を複数枚接合して作成したもの。

は5基の板碑が発見されたが、いずれも江戸時代の墓碑に転用されている。の中には五輪塔板碑と呼ばれるものもある。発見地点の西側背後に小規模な平山城の形態を呈した新城館跡があること、板碑の中には「鎌倉権五郎五代」の文字が見受けられること、江戸時代以前に新城館跡から群田遺跡の西脇を通過して小野(鳴瀬町)に通じる道があったとされることから、深谷荘の領主であった長江氏に関連した中世的世界が想定される。

江戸時代になると、新田開発、旧北上川や江合川の改修工事が行われ、舟運が盛んになる。平成2年度に調査された御塙蔵場跡では、基壇状遺構(上面:約400m²)が検出されている(佐藤:1991.3)。群田遺跡からは、主に18世紀代の遺物などが出土して井戸跡があることから屋敷跡と考えられる整地面、墓壙1基が検出されている(中野:前掲)。外に、涌谷街道や東浜街道の一里塚跡、陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡、須江瓦山窯跡、仙台藩の財政建て直しの一環として寛文年間に完成した新田開発に係る用水確保のための広瀬沼(大溜池・大堤)、そこに水を引くための継入堀、松ヶ窪、長岩堀、新継入堀の潜穴跡などがある。

II. 調査経過

1. 調査に至る経過

群田土砂採取工事は、株式会社高梨組(以下「高梨組」)による宮城県桃生郡河南町北村字群田53番地内における土砂の採取事業である。本事業を計画した高梨組は、平成6年9月、河南町に予定地についての開発計画協議を申し出、開発関連各法規に係わる審査を依頼した。同年同月、河南町教育委員会は、河南町より文化財の有無について審査の依頼を受けた。予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である群田遺跡に該当することから、河南町教育委員会は、河南町を通じて高梨組に「該当あり」との審査結果を伝えた。これにより同年同月、河南町教育委員会は高梨組と協議に入った。

同年10月、河南町教育委員会は土砂採取予定地の現地踏査を行った。遺物は採取されなかったものの、現況が杉や雑木の密生した山林であったため、遺跡の性格が十分に把握できる状況ではなかった。年度内の確認調査が予定されたが、高梨組による立木伐採・処分等の条件整備の間に他の緊急発掘調査が入ったため、6年度内の調査は実施されなかった。平成7年度も前記の緊急発掘調査が継続して実施されたため、7年度内の確認調査も実施されなかった。確認調査は、前記の緊急発掘調査が一段落した平成8年10月より開始した。

その成果を踏まえ、平成9年10月、河南町教育委員会は、記録保存を目的とする発掘調査を実施するための活動を開始した。

2. 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、高梨組による土砂採取予定地が『宮城県遺跡地図』(宮城県教育委員会:1993.3)登載

の周知の埋蔵文化財包蔵地である群田遺跡の範囲内に所在するため、遺跡の立地する丘陵頂部平坦面及び斜面を対象として実施したものである。

確認調査は、丘陵の地形に則って3~6m幅のトレンチを2~6mの間隔をもって設定して、重機あるいは一部人力によって表土除去を行い、遺構を確認した。

これによって、調査区内の遺構の分布が把握され、斜面に遺構が点在することが確認された。また、グリッドの設定、表記については、国家座標のX軸、Y軸に基づいて原点を設置し、東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表し、両者の組合せでグリッド名を表記した。

事前調査は、遺構の点在する箇所をつなぐようにその間と周辺について行った。効率的に調査を進めるため、重機を用いて表土を除去し、遺構を確認した。その結果、土壙1基、焼土遺構2基を検出した。

検出した遺構の実測図は、全て1/20図で作成した。

発掘調査は、平成8年10月17日から確認調査を開始し、同年11月8日に一時中断した。平成9年9月29日に再開し、確認調査及び事前調査を実施した。同年11月5日までに遺構の平面図・断面図、写真、調査区の全景写真及び文章記録等の記録化を全て完了し、調査を終了した。

III. 基本層序

今回の調査区は、丘陵頂部平坦面と斜面からなる。斜面は、多少の緩急はあるものの、ほぼ同一の傾斜を呈する。平成3・4年度の調査区における丘陵頂部平坦面と急斜面の北に続く頂部平坦面と斜面で、基本的には前回の調査区と同一の層準を示している。

〔I層〕褐(10YR4/4~7.5YR4/6)色のシルトである。本遺跡の表土で、調査区全域に分布する。粘性はなく、しまりに欠ける。層厚は、10~30cmである。現況は杉や雑木の山林である。前回の調査では少量の陶磁器、金属製品を含んでいたが、今回は遺物を含んでいなかった。

〔II層〕にぶい黄褐(10YR5/4~10YR4/3)色、暗褐(10YR3/3~10YR3/4)色、黄褐(10YR5/6)色、褐(10YR4/4)色の混合した層で、シルトと砂質シルトからなる。前回の調査区南西部における近世の整地された面を構成する盛土であり、今回の調査区においては存在しなかった。

〔III層〕暗褐(10YR3/3)色~黒褐(10YR2/2~10YR3/2)色のシルトである。調査区全域に分布する。I層よりもやや粘性があり、しまりに欠ける。層厚は、10~40cmである。前回の調査では少量の土師器、須恵器、土製品、金属製品を含んでいたが、今回は遺物を含んでいなかった。

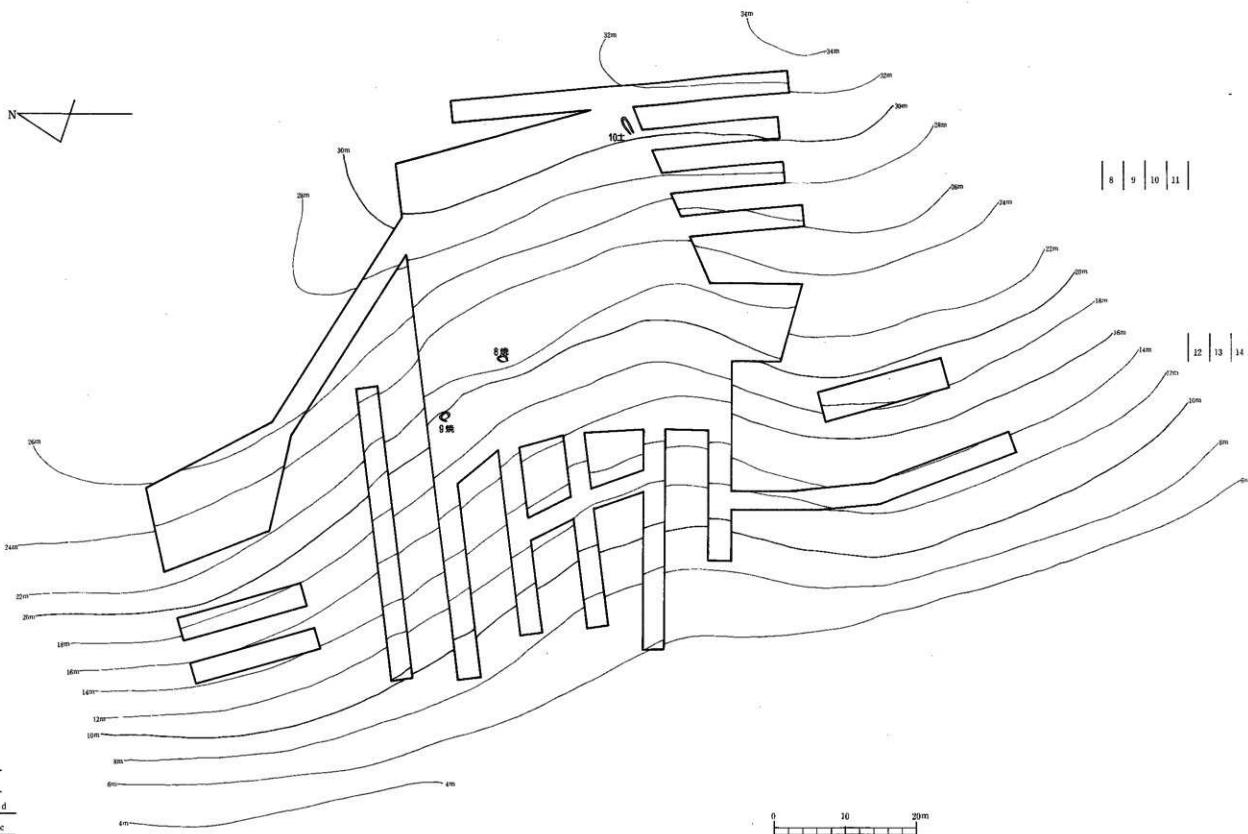
〔IV層〕黄褐(10YR5/6)色の砂質シルトである。本調査区の地山で、調査区全域に分布する。今回検出された全ての遺構は、本層上面で確認されている。

IV. 検出された遺構

今回の調査では、土壙1基、焼土遺構2基が検出された。遺物は、表面採取、土中よりの出土のいずれもなかった。

015	014	013	012	011	010	009	058	037	036	035	034	033	032	031	030	029	028	027	026	025	024	023	022	021	020	019	018	017	016	015	014	013	012	011	010	009	008	007	006	005	004	003	002	001	1	2	3	4	5	6	7
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	---	---	---	---	---	---	---

BA
AT
AS
AR
AQ
AP
AO
AN
AM
AL
AK
AI
AI
AII
AG
AF
AE
AD
AC
AB
AA
ts
ts
tq
tp
to
tn
tm
ti
tk
tj
ti
th
tg
tf
te
td
tc

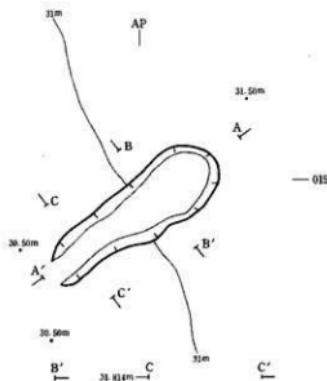
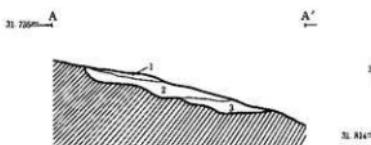


第2図 遺構配置図

1. 土 壤

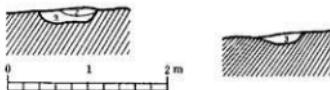
(1) 10号土壤

調査区丘陵頂部平坦面に接した丘陵斜面上部の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸2.48m、短軸0.84m、深さ0.26mの規模で、平面形は長円形を呈する。底面は舟底形で、壁は急に立ち上がる。いずれも基本層序IV層からなる。堆積土は3層に細分される。いずれも自然堆積層である。



No	土 色	土 性	質 素	大 別
1	褐7YR4/6	シルト	多量の鐵土を含む褐色。少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	自 然
2	褐10YR4/4	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含む。しまり有。	堆積層
3	にじい黄褐10YR4/5	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	

第2表 10号土壤土層註記表



第3図 10号土壤

2. 焼 土 遺 構

(1) 8号焼土遺構

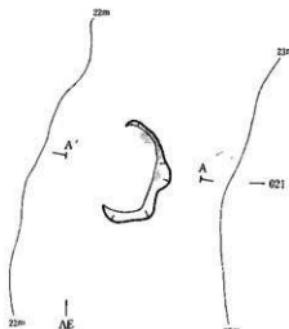
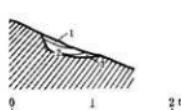
調査区丘陵斜面下半部の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸1.28m、短軸0.70m、深さ0.26mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。いずれも基本層序IV層からなる。

底面及び側壁の一部が赤褐色に

強く火熱を受けている。堆積土

は3層に細分される。いずれも

自然堆積層である。



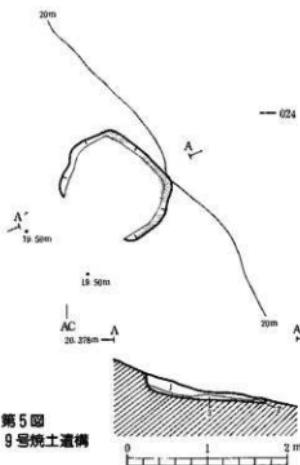
第4図 8号焼土遺構

No	土 色	土 性	質 素	大 別
1	褐褐10YR3/3	砂質シルト	少量の炭化物を粒状。地山土を粒・塊状に含む。	自 然
2	褐褐10YR5/6	シルト質砂	地山泥炭土。少量の褐褐10YR3/3砂質シルトを粒・塊状。炭化物を粒状に含む。	堆積層
3	灰褐褐10YR4/2	砂質シルト	少量の炭化物を粒状。地山土を粒・塊状。地山を粒状に含む。	

第3表 8号焼土遺構土層註記表

(2) 9号焼土遺構

調査区丘陵斜面下半部の基本層序IV層から確認された。後世(時期不明)の擾乱により、壁及び底面の一部に削平を受けている。確認面では擾乱の有無が分かりにくかったことから、本遺構が使用された年代に近い年代に擾乱を受けたものと考えられる。長軸1.41m、短軸0.93m、深さ0.25mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。いずれも基本層序IV層からなる。底面及び側壁の一部が赤褐色に強く火熱を受けている。堆積土は3層に細分される。いずれも自然堆積層である。



番	土色	土性	標	号	大系
1	黒褐色YR2/2	シルト	少量の炭化物・焼土を壁状に含む。		自然
2	褐色YR4/6	シルト	少量の炭化物(YR2/2シルトを壁状に含む)。		
3	褐色YR3/1	シルト	多量の炭化物を壁～窓状、少量の焼土を壁状、地山上を窓～窓状に含む。		堆積層

第4表 9号焼土遺構土層記録表

V. まとめ

今回の群田遺跡の発掘調査によって、以下のことがわかった。

- 前回(平成3・4年度)の調査では、8世紀末から9世紀代の竪穴住居跡、9世紀代の竪穴遺構、近世の建物が存在したと考えられる整地面、それに伴う井戸跡、溝跡等が検出されたが、今回は土壤1基、焼土遺構2基のみにとどまった。いずれも、時期不明である。
- 本遺跡の範囲から僅かに外れるものの、群田には熊野社という小社が祀られていたことから関連遺構の検出が想定された。しかし、関連遺構と想定される遺構は検出されなかった。
- 本遺跡の発見された契機となった遺物の採集された畠が前回の調査区の南側にあること、遺跡範囲の南半分に多く平坦面を有すること、今回の調査区の北側で以前に行った試掘調査では何も発見されなかったことから、本遺跡の主体部は前回の調査区域とその南側になると推測される。
- 安永年間に藩内の各村々の肝入に命じ、あるいは知行所単位毎に村々の様子について記された「風土記御用書上」(『河南町誌』下)には「一、屋敷名 三十六……一、郡田屋敷 武軒」とある。今回の調査区域や以前の試掘調査地点にはこれに相当する平坦面がなく、前回の調査区域とその南側に平坦面が広がることから近世の屋敷跡の広がりも遺跡範囲の南半分になるものと推測される。

引用・参考文献(五十音順)

- 石井武政・柳沢幸夫ほか(1982. 2) :「松島地域の地質」「地域地質研究報告」 通商産業省工業技術院地質調査所
- 伊東信雄(1957. 3) :「古代史」「宮城県史」第1巻 宮城県
- 小山正忠・竹原秀雄(1987. 1) :「新版標準土色帖」 日本色研事業株式会社
- 河南町(1971. 3) :「風土記御用書上」「河南町誌」下 河南町
- 佐藤敏幸(1991. 3) :「御塙藏跡」「河南町文化財調査報告書」第5集 河南町教育委員会
- 佐藤敏幸(1993. 3) :「須江塙跡群 代官山遺跡」「河南町文化財調査報告書」第6集 河南町教育委員会
- 佐藤敏幸(1993. 3) :「須江塙跡群 関ノ入遺跡」「河南町文化財調査報告書」第7集 河南町教育委員会
- 佐藤雄一(1986. 11) :「6板碑」「わがまち河南の文化財」 河南町教育委員会
- 志間泰治・桑月鮮(1991. 11) :「宝ヶ峯」 斎藤報恩会
- 清水東四郎(1924. 12) :「中山櫛跡（佳景山）（桃生郡史跡）」「宮城県史蹟名称天然記念物調査報告」2
- 鈴木省三(1924. 12) :「中山櫛」「宮城県史蹟名称天然記念物調査報告」1
- 高橋守克・阿部恵(1987. 3) :「須江塙跡遺跡」「河南町文化財調査報告書」第1集 河南町教育委員会
- 中野裕平(1988. 3) :「須江関ノ入遺跡詳細分布調査報告書」「河南町文化財調査報告書」第2集 河南町教育委員会
- 中野裕平・佐藤敏幸(1990. 3) :「関ノ入遺跡」「河南町文化財調査報告書」第4集 河南町教育委員会
- 中野裕平(1993. 3) :「群田遺跡」「河南町文化財調査報告書」第8集 河南町教育委員会
- 中野裕平(1994. 6) :「発掘された板碑」「六軒丁中世史研究」第2号 東北学院大学中世史研究会
- 藤沼邦彦・小井川和夫ほか(1989. 3) :「宮城県の貝塚」「東北歴史資料館資料集」25 東北歴史資料館
- 松本彦七郎(1919. 5) :「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小発掘成績」「人類学雑誌」34の5
- 松本彦七郎(1919. 9) :「宝ヶ峯遺跡について」「考古学雑誌」第9卷第9号
- 宮城県教育委員会(1993. 3) :「宮城県遺跡地図」「宮城県文化財調査報告書」第152集 宮城県教育委員会
- 三宅宗議・進藤秋輝ほか(1987. 3) :「赤井遺跡第1次発掘調査報告」「矢本町文化財調査報告書」第1集 矢本町教育委員会
- (1971) :「仙台領内古城書上」「仙台叢書」別巻
- (註) 著者氏名の記載については、日本国内における一般的な図書目録の記載方法に従い、同一図書における著者が2人までの場合は氏名全て、3人以上の場合はその図書を代表する2人の氏名のみの記載とし、3人目からは「ほか」の扱いとした。

写 真 図 版



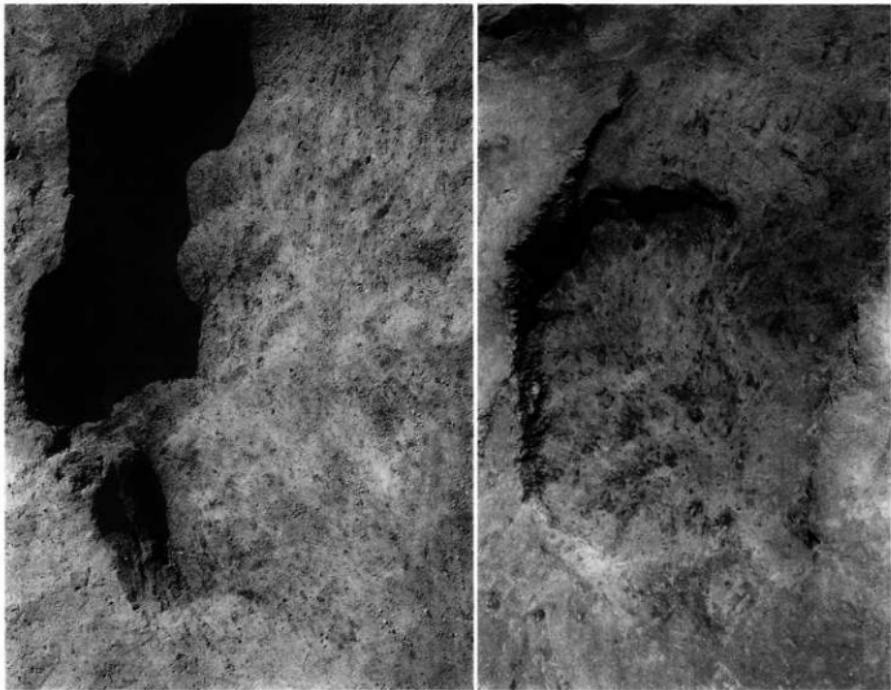
図版1-1 調査前全景



図版1-2 表土除去作業



圖版 2-1 10號土壤完耕狀況(上)
圖版 2-2 8號燒土遺構完耕狀況(左上)
圖版 2-3 9號燒土遺構完耕狀況(左下)





図版 3-1 調査区全景(1)



図版 3-2 調査区全景(2)

報告書抄録

ふりがな	ぐndeんいせき						
書名	群田遺跡 II						
副書名							
卷次							
シリーズ名	河南町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第9集						
編著者名	中野 裕平						
福集機関	河南町教育委員会						
所在地	宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7番地						
発行年月日	平成10年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	緯度	経度	調査期間	調査面積m ²	調査原因
ぐんでんいせき 群田遺跡	宮城県桃生 郡河南町北 村字群田53 番地 外	6 9	0 4 9	38° 27' 27'	141° 10' 10'	平成 8年10月17日 約4,100m ²	株式会社高梨 組による群田 土砂採取工事 によって削平 を受ける部分 の調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記	事項	
群田遺跡		不明	土壤・焼土遺 構				

河南町教育委員会文化財関係出版物

- 「わがまち河南の文化財」昭和61年11月 P. 1~201
- 「河南町文化財調査報告書」第1集「須江塙跡遺跡」昭和62年3月 P. 1~110(在庫なし)
- 「河南町文化財調査報告書」第2集「須江間ノ入道跡詳細分布調査報告書」昭和63年3月 P. 1~27
- 「河南町文化財調査報告書」第3集「須江間ノ入道跡詳細分布調査II」平成元年3月 P. 1~25
- 「河南町文化財調査報告書」第4集「須江間ノ入道跡－工集団地造成に伴う発掘調査概報」平成2年3月 P. 1~67(在庫なし)
- 「河南町文化財調査報告書」第5集「御塙塙跡－発掘調査報告書」平成3年3月 P. 1~21(残部僅少)
- 「河南町文化財調査報告書」第6集「須江窯跡群 代官山遺跡」平成5年3月 P. 1~108
- 「河南町文化財調査報告書」第7集「須江窯跡群 開ノ入道跡」平成5年3月 P. 1~230
- 「河南町文化財調査報告書」第8集「群田遺跡」平成5年3月 P. 1~72
- 「河南町文化財調査報告書」第9集「群田遺跡II」平成10年3月 P. 1~18

河南町文化財調査報告書 第9集

群 田 遺 跡 II

平成10年3月31日 発刊

発行 河 南 町 教 育 委 員 会

〒687-1102
宮城県仙台市青葉区南河原町御谷地字高沢7

TEL 0225(72)2111

印刷 株式会社 鈴 木 印 刷 所

〒689-0861

宮城県石巻市船出字新舟121

TEL 0225(22)41014
